

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0471500835		
法人名	社会福祉法人 田尻福祉会		
事業所名	認知症高齢者グループホームひだまり	ユニット名	
所在地	宮城県大崎市田尻大貫字境36-1		
自己評価作成日	平成 28年 9月 3日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成 28年 9月 21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

平成14年4月に公設民営で開設し「もう一つの我が家での喜びと安らぎのある生活～ゆったり・のんびり・私らしく」を理念に掲げ、更に平成25年12月からは、共用型デイサービス事業を開始しました。利用者の皆さんは、デイサービス利用者との交流もスムーズで、ドライブや外食と一緒に掛付けられて楽しまれています。今年度の運営目標『共に、より添う』の実践に向けての内部研修の充実を図り、職員のチームワークで日々のケアに取り組んでいます。地域との関わりも毎年送られる冬場のイルミネーションや地元のお祭りへの参加、事業所の行事や幼稚園児との交流などを通じて年数を経る事に深くなっていると感じています。これからも、日頃から地域の方々の協力が得られるような事業運営を考えていきます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

大崎市の東、加護坊山を望み、稲穂が垂れる静かな田園の中の小高い丘に、大貫デイサービスセンターと併設されたホームがある。ホームは法人の基本理念を受け、日々のケアのあり方を職員全員で検討し、今年度の目標を決めている。共用型デイサービスでは1日当たり定員3名を受け入れている。ボランティアの受け入れ、幼稚園児・小学生との交流、町内の各種行事等に参加し地域に密着している。北又自主防災組織に入り、駐在署のパトロールも適時に行われ協力関係にある。ホームは家庭的な雰囲気であり、職員は入居者に寄り添い、のんびり、ゆったりしたペースでその人らしく生活できるように支援している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 認知症高齢者グループホームひだまり)「ユニット名

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員会議でも基本理念を確認しながら、今年度運営目標「共に、より添う」の実践に努めている。年度末には、事業実績報告をする(理事会に提出)	職員は、基本理念と年度運営目標を実践するため、入居者の言葉、表情、態度等から気持ちを捉え、思いを逃さないように拾い集めている。入居者の希望を叶え、その人らしく生活できるよう支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日頃から定期的なボランティアに来てもらいながら、季節の行事へも協力をもらっている。近くの幼稚園や小学校等共に交流している。地域のお祭りにも参加している。	毎月、ボランティアによる歌・踊り・清掃・草取り・生け花等の来訪があり、入居者に喜ばれている。地域の夏祭り、かんぼやま祭り、小学校・幼稚園の行事等に参加し地域との繋がりを深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症キャラバンメイト研修修了者が「大崎市高齢者地域介護予防活動支援事業」の講師として協力するのは継続中である。地域包括支援センターと協力して「認知症地域相談窓口」を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年間6回の計画を予定し、行事等では参加者に活動状況の報告をしている。それぞれの立場での意見を頂き、向上に努めている。	ホーム行事日に併せ開催している。近場の火災時、消火器を玄関に置くよう提案があり、玄関を含め3カ所に置いている。今年度から、行政又は地域包括支援センター職員等が年6回以上参加する事を期待したい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	公設民営での設置、大崎市の指定管理を受けての決算報告等をしている。市民福祉課や地域包括支援センター等とも良好な関係が保たれている。	市が行う認知症勉強会でホームの取り組みを発表している。認知症サポーター養成講座の講師を担当し、地域へ出向き、認知症の講話をしている。市の「あんしん相談員」と情報交換をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日常生活の中にある事例等を職員同士で検討している。職員会議やカンファレンス等の時間を利用して、リスクマネジメントとの関係も考慮し、取り組んでいる。	目標達成計画に掲げ、身体拘束について毎月の職員会議で勉強会を実施し、ケアに活かしている。全職員は入居者の外出傾向を把握し、部屋から直接外に出ていくなど行動の予測が付かないので、注意して観察している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修で、職員がどのような時に虐待と感じてしまうか等の不安がないか、職員会議等で共通理解や認識を図り、虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修等で知識を得ながら、理解を深めている。現在は制度を利用する必要はないが、その時に対応出来るようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約書や重要事項説明書等での説明を丁寧に分かり易くしながら、不安の解消に努めている。いつでも、質問等には返答できるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	個別で話せる機会(家族訪問時や電話での連絡等)を利用しての現状報告から意見や要望を伺い、生活の質の向上に繋がるようにしている。「大崎市あんしん介護相談員」からの意見も参考にしている。	家族と直接話すことで意思疎通を図っている。家族の訪問時は、職員抜きで家族と入居者だけで過ごしている。要望により、外出好きな方と夕方ホームの周りを散歩している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議、年2回ある「人事考課制度」でのフィードバックを利用しながら意見交換をしている。また、「改善提案制度」でも意見の提案をしてもらっている。	資格取得に向けた勉強会を実施している。「改善提案制度」では毎年1人1件以上を提案する。家族に伝えたい事を記載する「家族伝言メモ」、炊飯時の「人数対水量の一覧表」等を提案した。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の「人事考課制度」での自己評価から全体評価で、個人の努力や実績が反映させられるようになっている。給与も連動しており、個人の努力の経過と結果を大切にしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経験年数に応じた資格取得の機会を確保しながら、外部や内部の研修を受講できる機会を設けている。日常業務でも相談を受けながら、必要なアドバイスをしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宮城県グループホーム協会に加入し、研修の参加、職員同士の交換研修等にも参加して情報の交換をしている。地域包括支援センターの地域会議等にも出席し、ネットワーク作りをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの利用開始前には必ず本人に会い、家族からの情報も利用しながら、できるだけ本人の想いが汲み取られるような聞き出しに努力をしている。本人にとっての安心とは何かを確認するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初に家族から今までの経過等の情報をもらい、今後の要望を聞き取り、不安や心配な点の解消に努める。信頼してもらうには、家族に何が必要かを見定めるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の心身状態の把握を的確に把握しながら、「その時」に必要な支援が提供できるよう、柔軟に対応方法を検討している。「その後」の対応にも不安がないよう支援する努力をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩として敬意をもって接しながら、「教わる」という気持ちを持ちで介護するよう、意識している。同等の立場になるよう接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と共に本人を支えるよう支援している。家族が大切してきたと思われるたくさんの事柄を受け止めていく努力をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所前からの理髪店や美容院などで出掛けていくのは継続している。兄弟や身内等が欠けていく事も理解してもらいながら、出来る限り関係が続くように支援している。	田尻にある馴染みの理髪店や美容院に行く。家族と自宅で食事をし、彼岸には友人と交流する。ドライブで実家を確認する。加護坊山の四季彩館でソフトクリームを食べる等、馴染みの関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性の情報を共有し、その日の気分の変化に職員が臨機応変に対応できるよう柔軟な支援で、お互いが気分良く過ごせる環境作りに努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設に入所しても現況を教えていただきながらの情報交換をしている。今後も安心してもらえるような会話を心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の会話からタイムリーな希望をかなえられるようにしたり、言葉だけでなく、表情や態度からも汲み取られるような対応を心掛けていて、職員も情報の共有を図っている。	各人の思いを日常生活の中から汲み取っている。パチンコに行きたい、宝くじを買いたい、外食で好きなものを食べたい等の要望を外出時に叶えた。職員は妄想のある方、不穏になる方等の情報を共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式の利用、家族からの聞き取りや関係者からの情報を集めて、職員で共有できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者毎に個人記録、生活の様子の記録や申し送りを活用しながら日々の生活リズムを掴んでいる。カンファレンス等でも心身の状態を再確認している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の生活の様子から課題を探り、解決できるような意見交換をしている。それをケアプランに反映させ、家族や医師などからの助言も反映させて作成している。	毎日の生活記録、個人記録等を記載し、カンファレンスを行い、3ヵ月毎にケアプランを見直し家族に説明している。看護師の意見で皮膚が弱く入浴できない方に清潔と保湿のため軟膏を塗るなど計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録や生活の様子の記録を毎日の申し送りに活用し、担当した時間帯での情報をそれぞれが共有できるようにしている。課題や問題点がはっきりとし、適切な介護の実践ができるようにしている。ケアプランの見直しにも活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族により生活環境が違うのを職員が理解しながら、その時々発生する課題を解決できるようにしている。事業所から提案して、本人が望んでいたと思われる一件に対応する事もできた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	区長や民生委員からの情報、社協「ボランティア友の会」からの定期的な来所などで社会情勢を身近に感じ、そこから楽しさが伝わっていると思われる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、ほぼ、大崎市民病院田尻診療所で、入所以前から通院している利用者が多く、家族も納得している。職員が必ず同行して状況報告をしている。	内科1名の他は協力医をかかりつけ医にし、通院は看護師が同行している。歯科は往診で治療している。通院結果は家族に報告している。夜間や緊急時は看護師や管理者に連絡する体制が出来ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場内の看護師は、職員会議やカンファレンスにも参加して、日々の情報を共有してくれている。様々な相談や判断時にも適切に対応してもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者との情報共有で、早期対応ができるようにしている。入院の際には、できるだけスムーズに入院でき、退院もできるだけ早期になるようにしたいと思っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に「急変時及び体調変化、重度化対応確認書」で意向確認をして、事業所での対応範囲を理解してもらっている。体調の変化に応じて、家族や医療機関と相談しながら、納得した終末期への対応を心掛けている。	看取りは実施しない。入居契約時に、法人の特養への申し込みも同時に行っている。介護度が上り重度化した場合は特養に移る。家族に説明し了解を得ている。急変時は救急医療機関へ搬送している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員が、2年に1度の救命救急法を受講している。消防署員からAEDの指導も受け、ホーム内にもAEDを設置している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的な避難訓練や地域との訓練を実施している。地域の「北又自主防災組織」にも組み込まれて、協力をもらう体制を継続している。	年2回の避難訓練は夜間想定で実施している。消防署から、避難終了の印に枕やゴミ箱をドアに置くと良い、窓から出たら鍵を掛ける等の指導があった。不審者には火災自動通報装置を活用する予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	分かり易い適切な言葉遣い、プライドを傷つけない対応、声の大きさ等に配慮しながら対応している。介護拒否される利用者には、特に配慮しながら対応している。	入居者を人生の先輩として敬っている。呼び名は「さん付け」で呼び、居室に入る時は必ず「ノックと声かけ」を実施している。失禁や失敗した時は、静かに騒がず他に気付かれないように対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人に確認しながら、本当に望んでいるのかを見極められるようにしている。選択肢を複数用意しての対応などを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個人の心身状態に配慮しながら、その日の行動を決められるようにしている。集団がよいか個人で過ごしたいかも確認して対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個人の嗜好を把握し、家族からも情報をもらいながら対応している。買い物をする際でも気に入った物を購入している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は、職員がテーマを決めて作成している。利用者の好みや季節の食材等で楽しんで食べてもらえるようにしている。利用者には、身体機能に応じて食事の準備より、茶わん拭きなどの片付けをしてもらっている。	献立は入居者の希望を聞き、職員が2週間交代で作成し、特養の管理栄養士からアドバイスを受けている。食材は農協から購入している。調査当日は新米の「サツマイモご飯」と、おやつは「パンケーキ」であった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者全員の食事量や水分量を把握しており、体調の変化に対応できるようにしている。食べる事に問題が生じた場合は、特養にいる管理栄養士にも相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの支援をしている。利用者2名が、歯科医院の口腔ケアを継続して受けている。治療が必要な時には、往診してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者個人毎に排泄パターンを把握して対応しているが、介護度が重くなるに従い自立は難しくなっているため、プライドに配慮しながらの対応をしている。	排泄チェック表に基づき、パターンを把握し、出来るだけトイレでの排泄を支援している。夜間は安眠を優先し、起きている時は声掛けする。何回もお尻を上げる、顔が強張る等はトイレのサインである。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個人毎に排便状況を把握して野菜や繊維質の多い食材、水分補給、運動も取り入れた対応をしている。主治医にも相談しながら対応をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望に添った入浴頻度や時間で対応している。リラクゼーション効果を感じられるようにアロマオイルも使用している。体調、体力の変化にも対応している。	午前は共用デイサービス、午後からグループホームで使用し、週に2~3回、好きな方は毎日入浴している。入浴剤は足元が見えず、アレルギーもあるので止め、柚子湯・菖蒲湯・アロマオイル等を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調に合わせたペースで対応できるようにしている。本人の表情やしぐさ、眠たさからも判断して対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人毎にファイルが作成されており、いつでも見る事ができる。看護師に相談すると説明もしてもらえる。体調の変化は、主治医に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人の生活歴や趣味などから、何が好きなのか何がしたいのかを判断して、それが提供できるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の天候、気温、職員人数によって、出来るだけ戸外に出られるようにしている。季節に応じての遠出も計画し、対応している。家族との時間も大切にもらえるようにも支援している。ここ最近、夏場は暑くて外出が難しくなっている。	年間計画があり、加護坊山の桜、南方のヤマメ園、色麻の芍薬等に家族やボランティアの協力を得てドライブ出かけている。天気の良い日には、公民館、メダカの郷等の周辺を散歩し、運動会総練習等、町立幼稚園や小学校行事を見学している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小額でも自己管理している利用者はいりますが、能力の低下で、しまい忘れや置き忘れがあり、逆に心配の素になってしまう事もあるので注意している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をもらった時に出来るだけ会話ができるような説明をしたり、単語でも話させるよう声掛けをしている。手紙ももらうので、本人に読んでもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間のメインになるフロアの壁は、季節毎に担当者を決め、利用者と一緒に作品作りをして飾り付けをして季節を感じてもらっている。室温や照明、臭いにも配慮して対応している。玄関先には、地域の方が何年間も生花を生けてくれ、利用者も職員も楽しませてもらっている。	玄関の外には休憩用の木製テーブルセットが置かれ、玄関には生け花が飾られている。天井が高く広いフロアにはソファと和室があり、東西の廊下の端の休憩所ではいつでも寛ぐことができる。フロアの壁の月見のウサギが季節感を出している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用型デイサービスの利用者も含めて居心地良く過ごしてもらえるように、その日の利用者や体調に合わせた対応を心掛けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた品々を持参してもらい、本人の身体状況に合わせて活動しやすく配置している。日中も夜間も安心して過ごせるよう、個人毎に配慮している。清潔の保持にも気をつけている。	馴染みの電気スタンド、茶筆筒等を持ち込み、位牌を持ってきている方もいる。マット張りの床は汚れた時に取替えが出来る様になっている。防火のため、コンセントの綿ゴミに注意し、暖簾は防災を使用している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個人毎の能力を把握して、出来る事は自分で、できない事はさりげなく職員が支援するようにしている。目印となるのれんをつけたっている。		